

第44回シナリオS1グランプリ 準グランプリ受賞『この一瞬のきらめきを』 桐乃さち

第44回シナリオS1グランプリ

部門①

この一瞬のきらめきを

桐乃さち

あらすじ

売れない少女漫画家の三好奈々は、取材に訪れたキャバクラで、中学校の同級生、笠原梨花と再会する。

梨花は拡張型心筋症を患い、補助人工心臓（以下、VAD）を付けていた。

編集者から、梨花を取材して難病物の漫画を描くように言われる。

人の病気を売り物にするような提案に気が進まない奈々だが、漫画家として後がないと言われ、奮起する。

梨花は奈々に、サポート介助者になって欲しいと頼む。VADを装着している患者は、機器のトラブルに備え、24時間介助者と一緒に過ごさなくてはいけない。長年、梨花の介助をしている両親は疲弊していた。

命を預かると言う重責に奈々は尻込みするが、梨花に弱みを握られ、渋々介助者を引き受ける。

わがまま放題の梨花に、奈々は翻弄される。しかし、命の危険にさらされながらも、懸命に自分のやりたいことをやっている梨花の姿に、だんだんと惹かれ、友情を感じ始める。

一方梨花には、健康体の奈々への嫉妬心が芽生えていた。

主治医から、梨花はVAD装着4年目。いつドナーが現れるか分からない心臓移植が唯一の助かる道であり、その為に精神的に不安定になっていると言われる。

奈々は、梨花が生きている世界の現実を知り、慄いて取材を止めようとする。しかし、編集者は今日も世界のどこかで脳死判定や臓器移植が行われている以上、それを世間に伝えるのも大切な仕事だと言う。

そんなある日、梨花の病状が悪化し、倒れ、そのまま亡くなってしまふ。

奈々は、梨花と仲直り出来なかったこ

とを悔やむ。しかし、梨花は奈々に手紙を残していた。手紙には、健康な人の死を願ってしまふ、梨花の複雑な感情が書かれていた。

奈々は、梨花のありのままの姿を漫画に描くことを決意する。

人物表

三好奈々(21) 漫画家

三好奈々(14) 中学生

笠原梨花(21) キャバクラ嬢

笠原梨花(14)(16) 中学生・高校

生

原田一哉(32) 医者

谷口良平(29) (株)豪栄出版 編集者

笠原進(54) 会社員

笠原実花(53) 主婦

陽子(40) キャバクラ「蝶の宴」のママ

飯島典子(26) 医療エンジニア

鈴木優馬(21) レンタル彼氏

三好和江(51) 奈々の母

キャバ嬢

キャバクラの男性客1～3

遊園地の係員

○中学校 外観

白い校舎、校庭。チャイムが鳴る。

○同 教室 中

中学生達が走ったり喋ったり賑やか。
眼鏡をかけた三好奈々(14)、教室の隅でノートに漫画を描いている。ノートには「三好奈々」と書かれている。
笠原梨花(14)が友達に囲まれ、楽しそうに笑っている。
奈々、こっそりと梨花を盗み見る。

○(株)豪栄出版 外観 (夕)

ガラス張りのオフィスビル。「株式会社豪栄出版」と書かれた看板。

○同 オフィス 編集部 (夕)

散らかったテーブルが並んでいる。社員達が忙しそうに仕事をしている。
部屋の隅のソファに、奈々と谷口良平

(29)が向かい合って座っている。谷口、漫画の原稿を読んでいる。

谷口「うーん。いつもの三好奈々さんの感じですよー」

奈々「……」

原稿には、女性をお姫様抱っこしている男性が描かれている。

谷口「今時こんな王子様みたいな……」

奈々「でも私が描きたい世界はこれなんです」

大きな咳払い。離れた所に座っている部長が、谷口に目で合図する。

谷口「実は今回限り、僕は三好さんの担当降りることになってるんです」

奈々「え！？」

谷口「短い間でしたがお世話になりました」

奈々「えっと、あの、次の担当の方は？」

谷口「今後は三好さんには担当がつかないことに決定しまして」

奈々「それって、じゃあ次からどなたにネームをお見せすればいいんですか？」

谷口、漫画雑誌の公募ページを見せる。

奈々「え！？」

谷口「すみませんね」

奈々「そんな、困ります！ 次の連載が決ま

らないと私……」

谷口、原稿を揃えて奈々に返す。

谷口「三好さんの漫画には人間がいないんです」

奈々「……え？」

谷口「これからちよつと、取材行きませんか？」

奈々、ぽかんと口を開ける。

○キャバクラ「蝶の宴」 店内（夜）

ネオン輝く店内。

ドレスを着た美しい女性達が男性客と酒を飲んでいる。

ソファに奈々、谷口、キャバ嬢が座っている。奈々、身を縮ませている。

キャバ嬢「えー！ じゃあこちら、漫画家さ

「なんですかあ？　すごーい！」

谷口「そう、『きらめきロマンス』って知ってる？」

キャバ嬢、首をかしげる。

奈々、谷口の服を引っ張る。

奈々「ちよっと、谷口さん！」

谷口「ん？」

奈々「これって、何ですか？」

谷口「何って、取材」

奈々「た、谷口さんが楽しんでるだけじゃないですか」

谷口、手を広げる。

谷口「よく、見て下さいよ」

奈々、店内を見回す。男性客に胸を触られそうになっているキャバ嬢や、楽しそうにカラオケを歌う客。

谷口「どう思います？」

奈々、顔をしかめる。

奈々「欲望の固まり」

谷口「そう！　それなんですよ、三好さんの

漫画に足りないものは！」

奈々「え？」

谷口「つまりですね、人間って言うのは、一

皮剥けば、人に言えないようなどろどろや

嘘や憎しみを隠し持つてるんですよ！」

奈々「よく、分かりません……」

シャンパンの栓が抜ける音がする。谷

口と奈々、驚いてそつちを見る。

○同 梨花のいるソファ席（夜）

華やかなドレス姿の梨花（21）の前に、

男性客1が座っている。梨花と男性客、

シャンパンで乾杯している。

男性客1「梨花ちゃん！ 今日こそアフター

付き合ってよー」

梨花「ごめんなさい、もう上がりの時間なの」

男性客1「ええー、もうそんな時間？ 寂し

いなあ」

陽子（40）がやって来る。

陽子「申し訳ございません、私が朝までお付

き合いしますから。さき、こちらへ」

男性客1「ママにそう言われちゃあね。梨花ちゃん、またね」

陽子、梨花に耳打ちする。

陽子「（小声）お父さん迎えに来てるわよ」

梨花「はい」

陽子、男性客1を別の席に案内している。梨花、足を組んであくびをする。

○同 奈々のいるソファ席（夜）

奈々と谷口、梨花を見ている。奈々、何度も瞬きをする。奈々、立ち上がり、恐る恐る梨花に近づく。

谷口「三好さん？」

○同 梨花のいるソファ席（夜）

奈々、梨花の前に立つ。梨花、奈々の全身をじろりと見る。

梨花「何ですか？」

奈々「あの、笠原梨花ちゃんだよね？」

梨花、怪訝そうに首をかしげる。

奈々「私の事覚えてない？ 中学で一緒だった三好奈々なただけだ」

梨花「え、誰？」

奈々、がつくりと肩を落とす。谷口がやって来る。

谷口「三好さん、どうしたんですか？」

奈々「あ、すみません。中学校の時の同級生の子だったんで、思わず」

谷口「そうだったんですか。初めまして、豪華出版の谷口と申します」

谷口、梨花に名刺を渡す。

奈々、梨花が肩から下げている黒いナイロンバッグを見つめる。バッグにはヘルプマークが付いている。

梨花「どうも。出版社の方？」

奈々、バッグから『きらめきロマンス』と書かれた漫画を取り出して渡す。

奈々「私ね、今漫画家やってるの。って言うっても、単行本一冊しか出てないけど」

梨花「あー！ 分かった。あんたいつも教室の隅でこそこそ漫画描いてた、眼鏡っ子でしょ！」

奈々、赤くなつて俯く。

梨花「眼鏡っ子、今でも漫画描いてるんだ」
奈々「うん……」

梨花、腕時計を見つめる。

梨花「やば。私、そろそろ帰らないと。パパが迎えに来てるんだ」

奈々「パパ？」

梨花「あ、ふふ。血が繋がってる方のパパね」

谷口「お父様が迎えに？」

梨花「ああ、私、病気なんです。拡張型心筋症ってやつ。知らないですよね？」

奈々「え……」

谷口「拡張型心筋症……。確か、心臓が肥大してしまう難病ですよね」

梨花「お詳しいですね」

谷口「一応、編集者なんで」

梨花、バッグを開ける。中に機械が入

っている。そこから管が出て、梨花の服の中につながっている。

梨花「これ、心臓から直接つながってんの」
奈々「心臓から!？」

梨花、服をめくる。お腹に穴が開き、管が刺さっている。奈々、息を飲む。

梨花「補助人工心臓って言う機械の助けを借りて心臓を動かしてるの。この機械がないと死んじゃうからさ」

梨花、服を戻してバッグを叩く。

谷口「大変ですね、機械を付けた生活って言うのは」

梨花「別に。激しい運動したりしなければ、普通の人と同じように生活出来ますよ。でも……」

谷口「でも？」

梨花「これ付けてると、24時間、介助者と一緒にいないといけないんですよね」

奈々「介助者？」

梨花「そういう決まりなの。私の場合は両親

と、ここで働いている時は陽子ママ」

客とはしゃいでいる陽子の姿。

梨花「だけど、パパも仕事があるし、普段はほとんどママと家にいる。本当はもつと外で遊びたいんだけどなー」

梨花、頭の後ろで手を組んでため息をつく。谷口、真剣に梨花を見つめる。

梨花、バッグを持って立ち上がる。

梨花「それじゃ、もう帰る時間なんで」

谷口「失礼ですけど、もう少しお話聞かせていただけませんか？」

梨花「え？」

谷口「あなたをモデルにした漫画を描かせていただけないでしょうか！？」

奈々、目を見開く。

奈々「え！？」

梨花「はあ？ 漫画？」

谷口「三好さん、チャンスですよ。梨花さんは魅力的な女性だし、彼女を主人公に恋愛漫画描いたら、絶対当たりますよ！」

奈々「ええ！？」

梨花、奈々をじろじろと見つめる。

梨花「眼鏡っ子の漫画ねえ」

梨花、テーブルの上にある『きらめき

ロマンス』を手に取る。

梨花「これ、面白かったら考えてあげる」

谷口「よろしくお願いします！」

梨花、手を振って立ち去る。

奈々「谷口さん、いきなり何言い出すんです

か！」

谷口「友達ならいろいろ聞きやすいでしょ？」

奈々「友達って言うか……」

谷口「難病物のラブストーリー、頼みますよ」

奈々「私、気が進みません。病気の人を利用

するみたいなの、そんなこと……」

谷口「三好さん、こんな魅力的な題材目の前

にして漫画にしようと思わなかったら、も

う漫画家として終わってますよ」

奈々「う……」

谷口「次の連載決めたいんですよね？」

奈々「でも……」

谷口「あの子の事を漫画にするなら、会社に内緒で僕がこっそりサポートします。最後にやってみませんか？」

奈々「私……」

谷口、ため息をついて立ち去る。

奈々、俯いて唇を噛み締める。

○キャバクラ「蝶の宴」 店の前（夜）

車が止まっている。

中で笠原進（54）が寝ている。

梨花、店から出て来る。梨花、窓をノックする。笠原、熟睡している。

梨花、再びノックする。

笠原、はっと目を覚まし、鍵を開ける。

笠原「ごめんごめん、お疲れさん」

梨花、車に乗り込む。

○同 車内（夜）

笠原と梨花、車に乗っている。

梨花「パパ、大丈夫？」

笠原「何言ってるんだ」

梨花「最近、残業続きだったのに、私の迎えまで……」

笠原、よだれを拭いて車を発進させる。

梨花、心配そうに笠原を見つめる。梨花、バッグから谷口の名刺を取り出して、見つめる。

○奈々の自宅 全景（夜）

こじんまりとしたアパート。

○同 居間（夜）

一人暮らし用の小さな部屋。本棚には少女漫画が並んでいる。

奈々、体育座りをしている。

奈々、立ち上がって古いノートを取り出す。中学生の時に書いていた梨花のイラスト。

電話が鳴る。奈々、急いで出る。

奈々「はい！」

和江の声「奈々！？」

奈々「なんだお母さんか」

和枝の声「なんだじゃない！ あんた家賃遅

れてるんだって！？」

奈々「う……」

和枝の声「大家さんが困って連絡来たよ。こ

っちで振り込んどいたけど」

奈々「ごめん、ありがとう」

和枝の声「あんた漫画で稼いでるんじゃない

の？」

奈々「ちよつと、急に仕事無くなっちゃって。

ら、来月は大丈夫だから」

和枝の声「ほんとに？ また大家さんに迷惑

かけんじゃないよ！？」

奈々「だ、大丈夫」

和枝の声「お父さん怒って、今から東京に迎

えに行くって言ってたけど」

奈々「え！」

和枝の声「どうする？ こっちでパートでも

しながら農業手伝うか!？」

奈々「それはやだ! まだ私……」

和枝の声「やだって、暮らせないもんはしよ

うがないでしよ!」

奈々「だけど……」

和枝の声「お父さんにはとりあえず様子見よ

うって言つといたから。でもこれが最後だ

よ。いいね!？」

電話が切れる。奈々、ため息をつく。

奈々再びノートを見つめる。

奈々、スマホを操作する。

「谷口」と表示されている画面。奈々、

電話をする。発信音。

谷口の声「はい」

奈々「あの、三好です」

谷口の声「はい」

奈々「今日はすみませんでした。私、やっぱ

り漫画家が続けたいんです。お願いします、

もう一度チャンスいただけませんか?」

奈々、スマホを握り締めて返事を待つ。

谷口の声「笠原さんから取材の連絡が来ました」

奈々「え……」

谷口の声「明日の8時、南原総合病院に来て

欲しいそうです」

奈々「病院？」

谷口の声「このタイミングで電話が来なかったら別の漫画家に振る所でしたよ。しっかりと取材して来て下さいよ」

奈々「はい！」

電話が切れる。奈々、ペンを握り締める。

○南原総合病院 入り口 前（朝）

「南原総合病院」と書かれた大きな病院の前に、奈々が立っている。

奈々の目の前にタクシーが止まる。

ドアが開き、梨花が出て来る。

梨花「奈々！ 早いね！」

奈々「今日はよろしくお願いします！」

梨花「どうしたのよ、改まって」

タクシーから、笠原が降りて来る。

笠原「おはようございます。梨花の父です」

奈々「あー、どうも、漫画家をやっています、

三好奈々です」

笠原「梨花の面倒見てくれるとか……。本

当にありがとうございます」

奈々「は？」

梨花、笠原の背中を押す。

梨花「パパ、もう行っていいよ」

笠原「いや、パパも一緒に行くよ」

梨花「大丈夫だって！ 今日から奈々が一緒
にいてくれるんだから」

笠原「いやだけど、心配だから」

梨花「いいから帰って！ 先生もいるし、大

丈夫！」

笠原「でも」

梨花「今日は休んでって言ったでしょ！ バ
イバイ！」

梨花、笠原をタクシーに押し込めて、

ドアを閉める。タクシーが走り去る。

奈々「ねえ、梨花ちゃん。今のつてどういう意味？」

梨花「呼び方、梨花でいいよ。早く行こ」

梨花、奈々の腕を取って歩き始める。

○同 研修室（朝）

小さな会議室。数人の男女が椅子に座っている。梨花と奈々も、隣同士で座っている。梨花、『きらめきロマンス』を読んでいる。

奈々「ねえ、今日は検査か何か？」

飯島典子（26）が、小さな機械が乗ったワゴンを押して入って来る。

典子「本日はお忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。講習を担当させていただきます、医療エンジニアの飯島です。よろしく願います」

スライドに「VAD 患者のサポート介助者講習」と表示される。

奈々「サポート介助者？」

スライドに心臓の写真が写る。

飯島「拡張型心筋症とは、心臓の筋肉が薄くなり拡張してしまう病気です。心臓のポンプ機能が弱くなる為、送り出せる血液の量が減ってしまいます」

スライドが変わる。心臓に機械の血液ポンプが付けられている図。

飯島「その為VADと呼ばれる血液ポンプを心臓に装着して血液循環を補助します」

奈々、梨花のVADを見つめる。

飯島「VADを装着している患者さんは機器トラブルや体調の異変に備えて、24時間介助者と行動を共にしなければいけません」

飯島、笑顔で機械を持ち上げる。

飯島「今日は介助者に必要な知識をしっかりと学んでいただきます。では、機械の操作方
法からご説明しますので前に来て下さい」

奈々、目を見開く。

奈々「ねえ、これって」

梨花「介助者講習」

奈々「私が梨花ちゃんの介助者になるってこと！？」

梨花「そうだよ」

奈々「聞いてない！」

梨花「え？ 言ってなかったっけ？」

奈々「私はただ取材のつもりで」

梨花「取材するなら、ついでに介助者になってよ。うちのパパ、昼は普通に仕事してるし、体力的にもう限界なんだよね」

奈々「む、無理だよ。そんな責任重大な事」

飯島、梨花と奈々を見つめる。

飯島「どうしました？ 集まって下さい」

奈々「あ、いや、あの……」

梨花、肩から下げたバッグを叩く。

梨花「すっかり勉強して来てよね。私の命が

かかっているんだから」

奈々「い、命って」

梨花、漫画を読み始める。

梨花「あはは、この男、ださっ」

飯島と参加者の視線が奈々に集まる。

奈々、ノートを持ってとぼとぼと飯島の前に行く。

飯島「最後に認定テストを行いますので、しっかりと覚えて下さいね。では、まずはバッテリーの交換方法からご説明します」

奈々、泣きそうな顔で聞き入る。

○同 廊下

梨花と奈々が歩いている。奈々、ノートを読みながら歩いている。

奈々「バッテリーに亀裂や変形が無いか日々チェックする。万が一破損が認められた場合はバッテリーを交換する……」

梨花「さすが眼鏡っ子、じゃなくて奈々。テスト一発合格！」

奈々「一回やっただけじゃ全然不安なんですけど！」

梨花「大丈夫。先生も飲み込みが早いって褒めてたじゃん」

奈々、恨みがましく梨花を睨む。

梨花「そんなに心配しなくても大丈夫だよ。

もし機械が壊れたり私が倒れたりしたら救

急車呼んでくれればいいし」

奈々「そんな簡単に！」

梨花「もう4年も使ってるけど大したトラブル

ル起こってないし」

奈々「今日何か起こるかもしれないじゃないやな

い！ 万が一機械が壊れてVADが止まった

りしたら、し、心臓も止まっちゃうんでし

よ……」

奈々、身震いをする。梨花、腕組みを

して手を出す。

梨花「スマホのボイスメモ出して」

奈々「へ？」

梨花「は・や・く！」

奈々、スマホを操作して、梨花に渡す。

梨花「私、笠原梨花は、三好奈々さんと一緒

にいる時に何かあったとしても、絶対に

奈々さんのせいにはしません」

梨花、スマホを奈々に返す。

梨花「これで安心でしょ？」

奈々「そんな……」

梨花「一緒にいてくれるだけでいいから！

お願い！ この通り！」

梨花、手を合わせる。

奈々「……じゃあ、取材もちゃんとさせてくれる？」

梨花、目を輝かせる。

奈々「そもそも、何で病気だって分かったの？」

梨花「高校入ったぐらいから、ずっと体調悪かったの」

○（回想）高校 校庭

体操着を着た梨花（16）が走っている。

梨花、胸に手を当てて倒れる。

梨花の声「体育の時間に倒れて、救急車で運ばれて」

梨花に駆け寄る教師や生徒達。

救急車のサイレン。

○元の南原総合病院 廊下

奈々と梨花が歩いている。

奈々「梨花ちゃん、大変だったんだね」

梨花「別に。死ぬよりましじゃん」

奈々「……じゃあ、もう家に帰ろうか」

梨花「は？」

奈々「安静にしてないと」

梨花「何言ってるの？ 遊び行くに決まって

んじゃん」

奈々「え！？ だめだよ」

梨花「何で？ 取材したいんでしょ？」

奈々「今日は家でゆっくりお話し聞かせてく

れない？」

梨花「何よ。心臓病患者は家で大人しく寝て

ろっての？」

奈々「そうじゃないけど」

梨花「ねえ、本当に大丈夫だからさ」

奈々「だけど……、やっぱり何か起こったら

困るし……」

梨花、奈々を睨みつける。

梨花「あっそ。じゃあもういいよ。私一人で行くから」

梨花、スタスタと歩いて行ってしまおう。

奈々「ちよつと待って！ 一人でなんてだめだよ！ もし何かあったら……」

奈々、走って追いかけてようとして、落ちていたごみを踏んで足を滑らせる。

奈々「きゃあ！」

廊下を歩いている白衣姿の原田一哉（32）が、奈々に駆け寄る。奈々が転ぶ寸前、原田がお姫様抱っこをして助ける。奈々、驚いて目を見開く。

原田「大丈夫ですか！？」

奈々、原田の腕の中で硬直している。

奈々「す、すみません」

奈々、原田に釘付けになっている。原田、奈々をそつと床に立たせる。

原田「怪我、していませんか？」

奈々「は、はい」

梨花「何やってんのよ」

原田「あれ、梨花ちゃん。来てたの」

梨花「うん」

原田「なんだ。声かけてよ」

梨花「もう帰るから」

原田、奈々を見る。奈々、赤くなる。

原田「梨花ちゃんのお友達？」

梨花「職場の同僚。介助サポーター講習に来

たの」

原田「え！？ 介助者になっていただけなん

ですか!？」

奈々、戸惑って目を逸らせる。

原田「良かったね、梨花ちゃん」

梨花、そっぽを向く。

原田「VADを付けていても、気を付けていれ

ば普通の生活が送れるんです。だけど、2

4時間介助者と一緒じゃないと行動出来な

いっていう制約があるから」

奈々「は、はい」

原田「今の制度ではヘルパーさんを利用することも出来ないし、どうしてもご家族の負担が大きくなってしまいうんですよ。だからこうして、身近な方が介助者になってくれるのは理想的なんです」

奈々「いや、あの……」

原田「あ！ 最初は何かと不安ですよね」

原田、奈々に名刺を渡す。

原田「梨花ちゃんの主治医の原田です。その名刺の番号にかけてくれれば、いつでも相談に乗れますから。何でも聞いて下さいね」

奈々「……はい」

原田「じゃあ梨花ちゃん。あんまりわがまま言って困らせないようにね」

梨花「はい」

原田「じゃあ、よろしくお願いします」

原田、立ち去る。奈々、原田の後姿を見守っている。

梨花「目がハートになってる」

奈々、慌てて手で目を隠す。

梨花「ふーん、奈々って原田先生みたいなのがタイプなんだ」

梨花、奈々の手から名刺を取り上げる。

奈々「あ！」

梨花「ちゃんと介助者やってくれたら返して

あげる」

梨花、歩き出す。

○公園 広場

海が見える公園。

奈々と梨花が立っている。

手をつないだカップルや家族連れが歩

いている。

奈々「ここで何するの？」

梨花「デート」

奈々、目を丸くする。

鈴木優馬(21)が手を振りながら近づ

いて来る。

奈々「梨花ちゃん、彼氏いたんだ!？」

梨花「いない訳ないでしょ」

奈々「へえー！」

梨花「さすがに。パパの前じゃいちゃいちゃ出
来ないからさ、奈々がいてくれて助かるわ」

鈴木、奈々と梨花の前に立つ。

鈴木「お待たせ！ ごめん、待った？」

梨花「待った」

鈴木「ごめんごめん！ あ、こちらが例の付
き添いの方？ 初めまして、鈴木優馬です」

奈々「初めまして。三好奈々です」

梨花「挨拶なんていいから。時間ないし、早
く行こう」

梨花、鈴木の手を取って歩き始める。

梨花「あ、奈々は離れてついて来てね。介助
者同伴とか、雰囲気ぶち壊しだから」

奈々、ふうと頬を膨らませる。

○同 薔薇園

様々な種類の薔薇が咲いている。梨花
と鈴木が手をつないで歩いている。そ
の数歩後ろを、奈々が一人歩いている。

○映画館 館内

ラブストーリーが上映されている。カップルだらけの客席。

梨花と鈴木、体を寄せ合って二人で一つのポップコーンを食べている。奈々、少し離れた席でポップコーンをやけ食いつている。

○カフェ テラス席(夕)

奈々と梨花が座っている。奈々、疲れたようにテーブルに突っ伏している。

梨花「何よ」

奈々「ずるい、あんな素敵な彼氏がいるなんて」

梨花、ふんつと鼻を鳴らす。

梨花「奈々は彼氏いないの？」

奈々「いない……」

梨花「ふっ」

奈々「笑った？ 今、笑った？」

鈴木、三人分のコーヒーを持って走つ

て来る。

鈴木「ごめんごめん、すごい混んでた」

梨花「もう時間じゃない？」

鈴木「あ、そうだね。じゃ、4時間デートコ

ース、映画とポップコーン、飲み物代金入
れて、合計3万2千430円いただきます」

奈々、目を丸くする。梨花、財布から
お金を出して渡す。

梨花「お釣りはいい。取っついて」

鈴木「え！？ いいの？」

梨花「その代わり、今度は別のデートコース
ちゃんと考えといてよ」

鈴木「もちろん！ 今日楽しかった。また
指名して下さいね」

鈴木、ウイंकをして立ち去る。

奈々「今の人って！？」

梨花「レンタル彼氏」

奈々「ええ！？ 恋人じゃないの！？」

梨花「本当の彼氏なんか出来る訳ないじゃん。

セックスも出来ないのに」

奈々、啞然として梨花を見つめる。梨花、コーヒを一気飲みする。

○道 タクシー 車内（夕）

奈々と梨花、後部座席に座っている。疲れたように目を瞑っている梨花。奈々、梨花の顔を見つめている。

○梨花の自宅 前（夕）

大きな一軒家。「笠原」と書かれた表札。奈々と梨花が立っている。

梨花「明日はバイト行くから、3時に家に来てくれる？ じゃあね」

梨花、家の中に入る。

奈々「ありがとうも言えんのかーい！」

奈々、空に向かって叫ぶ。

○奈々の自宅 外観（夜）

こじんまりとしたアパート。

○同 居間（夜）

奈々、机で漫画を描いている。梨花に
そっくりな女性キャラ。

奈々「うーん……」

奈々、頭をかきむしる。

○(株)豪栄出版 オフィス 編集部

奈々と谷口、ソファに向かい合って座
っている。谷口、ネームを見ている。

谷口「へえ、彼女、恋人がいたんですね」

奈々「……まあ、はい」

谷口、ページをめくる。

谷口「これ、どういう展開になるんですか？」

奈々「二人は恋に落ちて、支え合って生きて
いきます」

谷口「支え合うってってどんな風に？」

奈々「えっと……」

谷口「二人の両親は、反対しないんですか？」

将来についてはどう考えてるのかな？」

奈々「どうって……」

谷口 「結婚とか考えてるのかな？」

奈々 「……」

谷口 「あれ？ ちゃんと取材しました？」

谷口、ため息をついて頭をかく。

谷口 「拡張型心筋症と言う病気は、快癒する

唯一の方法が心臓移植です」

奈々 「はい」

谷口 「心臓移植を待つ彼女の心境、しつかり
考えました？」

奈々 「……」

谷口 「これじゃあ今までと変わらないんだよ
なあ。三好さんの漫画には人間の裏の部分
が無いんですよ」

奈々 「裏？」

谷口 「金が欲しいとか恋人が欲しいとか名誉
が欲しいとか。人間皆、何かしらあるでし
よ。この主人公は何が欲しいと思います？」

奈々、首をかしげる。

谷口 「これじゃ僕は降りるしかないかもな」

奈々 「そんな……！」

奈々、唇を噛んで拳を握り締める。

○梨花の自宅 前(夕)

ドアの前に梨花と奈々が立っている。

梨花、奈々の全身をじろつと見る。

梨花「今日も地味ねー」

奈々「……すみませんね」

梨花「まあ、いいや。行こう」

梨花、奈々の手を取り、歩き始める。

○キャバクラ「蝶の宴」 店内(夜)

ドレスを着て着飾った梨花が、にこやかに男性客2、3を接客している。

男性客2「梨花ちゃん、今日も眩しいなあ」

梨花「ありがとうございます」

男性客2「梨花ちゃんがお店に出ていない日

は、火が消えたみたいだもんな」

男性客3「今日はシャンパン入れちゃおうか

な！」

梨花「えー、いいんですかあ？」

梨花の後ろのカーテンがもぞもぞと動く。奈々、カーテンから顔を出す。

梨花「何やってんの。こっち来なよ」

奈々「こ、こんな格好無理だよ！」

梨花、立ち上がり、奈々を無理やりカー

ーテンから引っぱり出す。

奈々「だめだめだめ！」

奈々、ばつちりメイクをして、ドレスを着ている。

梨花「この子、今日からなの」

男性客2「おお、素朴で可愛いじゃん！」

男性客3「清純派って感じ。名前は？」

奈々「え？ えっと、三好奈々です」

男性客2、3、がくつと肩を落とす。

梨花「本名言ってどうすんのよ！」

男性客2、3、拍手をする。

男性客2「いいじゃん、いいじゃん。奈々ち

ゃん、よろしくね」

奈々「はあ……」

梨花「早く、座って座って！」

梨花に促され、奈々もソファに座る。

奈々「何も私までこんな格好することないじゃん！」

梨花「あのね、病院には奈々は私の同僚って事にしてあるの」

奈々「な、何で!？」

梨花「ただの友達じゃ、介助者として認定してもらえないの」

男性客2「あ、もしかして彼女、介助者なの?」

梨花「うん」

奈々「え!?! 梨花の病気の事知ってるんですか?」

男性客2「もちろんだよー、俺達、梨花ちゃん
の応援団だもん」

男性客3「俺も会社さえなければ梨花ちゃん
のこと24時間介助するのに。うううっ」

男性客2「お前はエロいことしか考えてない
だろ！」

男性客2、男性客3の頭を叩く。

梨花「今日は奈々が一緒にいてくれるから、いつもより遅くまでいられるんだ！」

梨花、黒服に向かって手で合図する。

奈々「梨花！ お酒はダメだよ」

梨花「分かってるって。私はいつもノンアルだもん」

奈々「ええ？ じゃあなんでこんな所で働いてるの？」

梨花、じっとシャンパンを見つめる。

梨花「かんぱーい！」

シャンパンを飲み干し豪快に笑う。

奈々、梨花を見つめる。

○繁華街 道（夜）

奈々と梨花、歩いている。

奈々「あーもう、遅くなっちゃった」

梨花「まだ9時じゃん」

奈々「規則正しい生活はVLD患者の基本でしょ！ それより体、冷えてない？」

奈々、梨花の手を握る。奈々、温める

ように梨花の手をこする。

梨花「……奈々、ありがとうね」

奈々、はっとして梨花を見る。

梨花「私、家でじっとしているのが嫌で、働きたくて。陽子ママに頼み込んで調子がい
い時だけ働かせてもらってるの。うちの親
も本当は反対だと思うけど、私の自由にさ
せてくれてる」

奈々「……」

梨花「だってさ、やりたいことやりたいじゃ
ん。いつ死ぬか分かんないでしょ？」

梨花、おどけたように頭を下げる。

梨花「だから、ありがとうございます」

梨花、踊るような足取りで歩いて行く。
梨花の隣をかすめるように、自転車が
走って行く。自転車、赤信号を無視し
て交差点に突入。クラクションが鳴ら
される。奈々、梨花に駆け寄る。

奈々「大丈夫!？」

梨花、走り去る自転車をじっと見つめ

ている。その梨花を見つめる奈々。

○奈々の自宅 居間（朝）

奈々、ベッドで寝ている。

枕元のスマホが鳴る。スマホには梨花からのメッセージ。「今からここに来て」地図の写真。奈々、目をこする。梨花からのメッセージ「おしやれして来てね！」奈々、首をかしげる。

○遊園地 前（朝）

ワンピースを着た奈々がやって来る。

梨花、入り口前に立っている。

梨花「遅ーい」

奈々「今日は家にいるって言ったのに」

梨花、奈々の全身をじろつと見る。

梨花「ふうん、まあまあじゃん」

奈々「何？ またデート？」

梨花、顎で遠くを指す。奈々、振り返る。物陰から手を振って出て来る原田。

原田「もう、出て来てもいいのかな？」

奈々、目を見開いて後ずさる。

奈々「え？ え！？」

梨花「（小声で）デート」

奈々、慌てて前髪を撫でつける。

○同 園内（朝）

梨花と原田、その数歩後ろを奈々がお
ずおずと歩いている。

梨花「何から乗る？ 私が乗れるのあるかな」

原田「メリーゴーランドぐらいなら大丈夫だ

と思うよ」

奈々、ぶつぶつ独り言を言っている。

奈々「もう、どうしたらいいのよ、急に」

梨花「奈々、早くー」

梨花、笑顔で手を振る。

○同 園内 メリーゴーランド（朝）

出発前のメリーゴーランド。

梨花、奈々と原田の手を引いてはしや

いで馬を選んでいる。

梨花 「ねえねえ、どれ乗る!？」

原田 「落ちたら危ないから、馬車ぐらいにしておこうか」

梨花、相乗りできる馬を見つける。

梨花 「奈々と原田先生はこれ!」

奈々 「え!？」

梨花、戸惑う奈々を無理やり馬に乗せる。原田、奈々の後ろに乗る。

奈々 「ちよつと、梨花!」

係員がやって来る。

係員 「まもなく出発です。ご着席ください」

原田 「奈々ちゃん危ないよ、掴まって」

梨花、近くの馬車に一人で座る。発車音。メリーゴーランドが動き始める。

奈々、硬直して馬にしがみついている。

原田 「遊園地なんていつぶりだろう」

奈々 「きよ、今日は、お仕事は……」

原田 「うん、ちょうど当直明けだったんだ」

奈々 「ど、どうして……」

原田「梨花ちゃんから遊園地に行きたいけど、心配だから付いてきて欲しいって。本当は患者さんと外で会うのはダメなんだけどね」

梨花、スマホを片手に手を振っている。

梨花「原田先生！ 奈々ー！」

梨花、写真を撮っている。

原田「あんなに楽しそうな梨花ちゃん初めて見たよ。奈々ちゃん、ありがとうね」

奈々、緊張してそれどころではない。

○同 園内

奈々、梨花、原田、ソフトクリームを食べながら歩いている。

梨花「奈々。次何乗る？」

奈々「（小声で）ねえ、もう帰らない？ 私

緊張しちゃって」

梨花「あ！」

梨花、ジェットコースターを指差す。

○同 ジェットコースター 前

奈々、梨花、原田、看板を見ている。

「妊娠中の方、心臓病のある方のご利用はご遠慮いただいております」と書かれています。

梨花「あーあ、やっぱりダメか」

原田「主治医としても許可する訳にはいかないなあ」

梨花「私、これ大好きだったのに」

梨花、残念そうにジェットコースターを見つめる。

梨花「奈々は乗って来たら？」

奈々「いい、いい！ 私、絶叫系無理だから」

梨花「えー、楽しいのに」

奈々「乗ったことないもん！」

梨花「そうなの！？ 乗ってみなよ！」

奈々「無理だって！」

梨花、奈々の服を引っ張る。

梨花「（小声で）吊り橋効果！」

奈々「へ？」

梨花「知らないの？ こう言う乗り物に一緒

に乗った男女は恋が芽生えるんだって」

奈々「……ほんと？」

梨花「何の為にセッティングしたと思っ
てんのよ」

奈々、ごくつと唾を飲み込む。梨花に
促され、奈々、原田の前に立つ。

奈々「私、乗ります！」

梨花「先生も一緒に行つて来て」

原田「うーん、梨花ちゃんを一人にする訳に
はいかないからなあ」

奈々、愕然とする。

○同 ジェットコースター 座席

奈々、顔面蒼白で先頭に座っている。

○同 園内 ジェットコースター 前

梨花、ジェットコースターをじっと見
つめている。

○同 ジェットコースター 座席

奈々、先頭に座っている。ゆっくり上昇して行くジェットコースター。

奈々「無理無理無理無理……」

ジェットコースターが一気に落ちる。

奈々「いやー！」

奈々の目から涙が零れ落ちる。

○同 園内 ジェットコースター 前

梨花と原田、ベンチに座っている。

奈々がふらふらと歩いて来る。

梨花、奈々に駆け寄る。

梨花「ごめん、大丈夫だった？」

奈々、急にお腹を抱えて笑い出す。

奈々「あはははは、何これ！？ 楽しいー！」

梨花、ぽかんとして奈々を見つめる。

奈々「もうやだ！ あはははは！」

奈々、涙を流して笑っている。

梨花「……楽しかったの？」

奈々「もう、すごいね。あードキドキした！

もう一回乗りたいくらい！」

梨花、笑っている奈々を見つめる。

梨花「……もう一回乗ってくれば？」

奈々「え？」

梨花「行って来なよ。待ってるし」

奈々「ううん、もういいよ。次は梨花も乗れ

るやつ行こうよ。観覧車とか」

梨花「……乗ってくればいいじゃん」

奈々「いいって。待っててもらおうのも悪いし」

梨花、ベンチに座って足を組む。

奈々「梨花、どうしたの？」

梨花「行けばいいじゃん」

奈々「どうしてよ、観覧車行こうよ。乗りた

いって言ってたじゃん」

梨花、じつと奈々を睨みつける。奈々、

たじろぐ。梨花、いじわるく笑う。

梨花「ねえ、先生？ 奈々ってね、原田先生

の事好きなんだって」

原田「え？」

奈々、愕然と立ちすくむ。

梨花「奈々が先生とデートしたいって言って

たから、今日呼んだの。ねえ、奈々。楽しかったでしょ？」

原田、困ったように頭をかく。

奈々、かっと赤くなる。

奈々「い、いい加減にしてよ！ 病気だからって何でも許されると思わないで！」

奈々、はっとして手で口を押える。

梨花「あんたなんか、私が病気だから近寄って来ただけのくせに」

奈々、衝撃を受けて黙り込む。

奈々「最初はそうだったかもしれないけど。

今は、私は……」

梨花、じっと奈々を睨む。

奈々「か、帰る。取材も、もういいから」

梨花「何よ、もっと取材しなさいよ。私の事知りたいんでしょ？」

梨花、奈々を睨みつけている。

奈々「梨花、どうしたの。何かあったの？」

私で出来ることなら何でも……」

梨花「へえ、何でもしてくれるんだ？ じゃ

あ、奈々の心臓、私にちようだいよ」

奈々「！」

原田「梨花ちゃん！」

梨花「もういい、帰る」

奈々「待つてよ！」

奈々、梨花の手を取る。梨花、奈々を突き飛ばす。奈々、地面に倒れる。梨花、はつとするがそのまま歩き去る。

原田「奈々ちゃん、大丈夫！？」

原田、奈々を助け起こす。

原田「ごめんね、奈々ちゃん。梨花ちゃん、

今ちよつと、不安定になってるんだ」

奈々「……どうして」

原田「心臓がかなり肥大して、VADが無かつたら今すぐ心停止してもおかしくない状態なんだ。助かるには心臓移植しかないけど」

奈々、目を見開く。

原田「心臓移植のドナーはなかなか現れない。

梨花ちゃんはもう待機4年目だし、病状を

考えてもそろそろ順番が回って来てもいい

頃なんだけど……」

原田、梨花の後姿を見つめる。

原田「もし手術が出来たとしても、100%成功する保証は無い。そこは医者を信用してもらえないんだけど」

奈々「……」

原田「僕は梨花ちゃんを家まで送って行くよ」

原田、立ち去る。

奈々、歩いて行く梨花の姿を見つめる。

○(株)豪栄出版 オフィス 編集部

ソファ席に奈々と谷口が向かい合って座っている。

谷口「取材をやめたい？」

奈々「はい……」

谷口「うーん、面白い題材だと思うんですけどね」

奈々「私は……、面白いなんて思えません」

谷口、頭をかく。谷口、財布から運転免許証を取り出して奈々に渡す。

谷口「こう言うの、人に見せるもんじゃない
ですけど」

奈々、免許証を見る。臓器提供の意思
表示の欄、全てに丸が付いている。

谷口「俺は、もし脳死になったら、それは残念
だけど、体は誰かの役に立って欲しいっ
て思うんです。きっと、今この瞬間にも世
の中ではそう言うことが起こってる。それ
を世間の人に伝えるのが、俺らの役目かな
って思ったんです」

奈々、免許証を握り締める。

○本屋 店内

奈々、本棚から「心臓病の最新治療」
と書かれた本を取り、開く。

○奈々の自宅 全景（夜）

雨がぼつぼつと降っている。

○同 居間（夜）

奈々、心臓病の本を読んでいる。「心臓移植後の生活」や「生存率」の文字。

奈々、ため息をついてスマホを取り出す。梨花に電話をかける。

奈々「あ……もしもし、あの、私奈々だけど」

笠原の声「奈々ちゃん？」

奈々「……あれ？」

笠原の声「ごめんね、実は梨花、入院したんだよ」

奈々「え!?!」

笠原の声「2日前に、急にVADのアラームが鳴って、倒れてね」

奈々、目を見開く。

○（回想）南原総合病院 救急搬送口（夜）

救急車からタンカに乗せられた梨花が出て来る。原田や看護師が駆け寄る。

原田「梨花ちゃん、聞こえる？」

笠原「梨花！」

梨花、朦朧とした表情。

○元の奈々の自宅 居間（夜）

奈々、スマホを耳に当てている。

奈々「だ、大丈夫なんですか……？」

笠原「心臓が弱ってて、VADの力でも支え切れない状態らしいんだ」

奈々「そんな……」

笠原「今夜が山場って言われてるよ」

奈々「あの、私。私これから行きます！」

奈々、スマホを切って立ち上がる。奈々の手が当たり、グラスが落ちて割れる。奈々の手が震えている。

○南原総合病院 廊下（夜）

笠原、笠原実花（53）がベンチに座っている。奈々、走ってやって来る。

笠原「奈々ちゃん、わざわざありがとうね」

奈々「……あ、あの、梨花は？」

笠原「今はICUに入ってる。強心剤で何とか心臓を動かしてるけど……、このまま目が覚めない可能性もあるって」

奈々、愕然とする。

○同 ICU 中（夜）

梨花、様々な管につながれ、目を瞑っている。笠原と実花、梨花の手を握り締めている。

○同 廊下（朝）

奈々、手を組んで祈っている。

奈々「梨花……、まだ仲直りしてないよ……」

○同 ICU 中（夜）

梨花、目を瞑っている。心拍計が「ピーピー」と音を立てている。

原田や他の医師、看護師達が梨花を取り囲み、治療をしている。笠原と実花、泣きながら梨花を見つめている。

○同 全景（朝）

激しく雨が降っている。

○同 廊下（朝）

奈々、手を組んで祈っている。原田が現れる。奈々と原田、見つめ合う。原田が何か言う。奈々、目を見開く。

○同 ICU（朝）

梨花、目を瞑っている。看護師、酸素吸入器を外す。笠原、泣きながら梨花の顔を撫でている。実花、梨花にすがりついて泣いている。

○同 病院 前（朝）

土砂降り。奈々、ふらふらと病院から出て来る。奈々、雨で濡れるのも構わず、空を見つめる。奈々、声にならない悲鳴を上げる。

○葬儀場 受付（朝）

鯨幕がかかり、「笠原梨花 儀 葬儀会場」と書かれている。

○同 霊前（朝）

梨花の遺影が、たくさんの花に囲まれている。笠原、実花が座っている。喪服を着た奈々、焼香をしている。

○同 出口（朝）

奈々、歩いている。

笠原、走ってやって来る。

笠原「奈々ちゃん！」

奈々、振り向き、慌てて頭を下げる。

笠原「今日はありがとうね」

奈々「いえ……」

笠原「奈々ちゃんが介助者になってくれて、

梨花、毎日楽しそうだったよ」

奈々「私は何も……」

笠原、奈々に『きらめきロマンス』を手渡す。

笠原「これ、梨花が奈々ちゃんに返さなきゃって言ってたんだ」

奈々、漫画を握り締める。

○奈々の自宅 居間（夕）

奈々、喪服を着て部屋に入って来る。

奈々、バッグを床に置き、ぼんやりと座り込む。バッグから、『きらめきロマンス』が飛び出している。

奈々、『きらめきロマンス』を手に取り、ぱらぱらとめくる。

中から、手紙が落ちる。

奈々、はっとして手紙を手取る。

「奈々へ」と書かれている。

奈々、手紙を読み始める。奈々、しばらく手紙を読み、突然立ち上がる。奈々、引き出しから原稿用紙を取り出す。

奈々、鉛筆で絵を描き始める。

梨花の声「奈々へ あのさ、この間の事、私は謝らないからね」

奈々、夢中で絵を描いている。

梨花の声「もしかして、私に同情とかしてない？ そう言うの、マジ迷惑だから」

奈々、必死で絵を描いている。

梨花の声「私ね、街で誰かが信号無視とかしてると、あの人が今、事故に遭ったら心臓もらえるのかなって、無意識に考えるの」

奈々、原稿に絵を描き続ける。

梨花の声「テレビで事故のニュースやってると、もしかして、ドナーが見つかったって電話が来るんじゃないかって、スマホばかり気にしちゃう」

奈々、梨花にそっくりなキャラクターを描き続ける。

梨花の声「私、どんどん醜い人間になっていくみたい。こんな自分、大嫌い……」

奈々、静かに涙を流しながら絵を描いている。

梨花の声「私のせいで誰かが傷つくのは嫌。だから奈々も、もう私に近づかないで。それじゃあね、ばいばい」

手紙の最後に、大きく「PS 本当は私も原田先生が好き。だから譲るのはやめる！」と書かれている。

奈々、泣きながら原稿を書いている。

○奈々の自宅 全景（朝）

朝日が照り、雀が鳴いている。

○同 居間（朝）

奈々、床に倒れて寝ている。床には完成した原稿が並べられている。梨花にそっくりなキャラクターが、喜怒哀楽をむき出しにした表情で描かれている。

○同 オフィス 編集部

部屋の隅のソファに、奈々と谷口が座っている。谷口、原稿を読んでいる。

奈々「私、中学生の時梨花に憧れてたんです。

梨花はクラスの人気者で、美人で、かっこ

よくて。私なんか、絶対友達になれなくて」

谷口、原稿を読んでいる。

奈々「梨花に再会した時、梨花が病気だって知って、それなら私でも少しは近づけるん

じゃないかって思いました……」

谷口、原稿を読んでいる。

奈々「醜いのは私の方です……」

谷口、原稿を置いて立ち上がる。

谷口、奈々に手を差し出す。谷口、奈々の手を力強く握る。

○墓場

奈々、百合の花を持って歩いている。

○同 梨花の墓の前

奈々、墓に百合の花を供え、手を合わせる。奈々、バッグから漫画を取り出し、墓に備える。

タイトルは『この一瞬のきらめきを』。
奈々、立ち上がり、墓を後にする。

了

2000字詰原稿用紙換算120枚